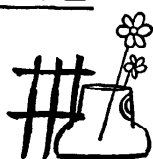


巻頭言



電子出版・卓上出版の発展と学会誌の将来

石田 晴 久[†]

パソコン、ワークステーション (WS)、低価格レーザビームプリンタ (LBP)、CD-ROM、電話用高速モデムなどの驚異的な発展により、電子出版や卓上出版 (desk-top publishing) がいよいよ現実のものとなってきた。

念のためいえば、電子出版とは紙によらない (ソフトコピーによる) 情報流通を指す。パソコン通信によるミニコミ誌の伝送や CD-ROM への辞書や百科事典の格納もこれに含まれる。一方、卓上出版の方は、入力・伝送されたマルチメディア情報を手許のディスプレイに表示して確認した後で、レーザプリンタなどできれいに出力することをいう。従来ワークプロと異なるのは、輪郭線 (ベクトル) で表現された多種多様なフォントを使って、文字や図形や画像が自由に拡大縮小できるようにになっていることである。

もっとも、これが安くできるのは、今のところ、欧文のみで、漢字まじり文となると、高価な専用システムを必要とする。しかし、ページ記述言語の研究と標準化に関連して私が会っている業界の人たちは、みんなこの面の開発に熱心だから、今年、2、3 年のうちには、漢字 LBP が安くなり、パソコンや WS による日本語文書の卓上出版が可能になることはまず確実であろう。

こうして電子出版や卓上出版の技術が進み、関連ハード/ソフトの標準化が達成されると、従来難しいとされてきた図形や数式や写真の入った文書、たとえば学会誌の論文などが、広域ネットワークを使って、電子的に伝送できるようになる。電話用モデムも安くて速いものが出始めたから、伝送網は電話系でもよい。

現に筆者の周りでは、国内の研究者用ネットワークである JUNET と、それにつながっているアメリカの CSNET (Computer Science Network) などを通

して、英語ならマルチメディアの、日本語では文字のみの論文の交換が始まっている。英語文書の表現形式は、TeX と LaTeX (ともに電子出版用ユーザ言語)、PostScript (卓上出版用中間言語) などである。

実際にこうした文書交換をしてみると、なかなかよい。郵便よりずっと速いし、コピーの劣化はないし、柔軟性も高い。What you see is what you get 方式で、最終的に印刷にかなり近いハードコピーがえられるのだから便利である。

そこで、改めて考えてみたいのは、こうした技術が学会誌の今後のあり方にどう影響するか、である。しばらく前、IEEE Software 誌の編集長であるシュライバー氏に聞いたところによると、同誌では、投稿をパソコン通信またはフロッピーで行わせており (ただし図や写真は紙を郵送)、査読もほとんどすべてパソコン通信で行っているという。おかげで査読が非常に早くなった由である。IEEE といえば、最近 Computer 誌からきた原稿募集の手紙には、連絡先が notkin@june.cs.washington.edu と pbh@suny-sb.csnnet@RELAY.CS.NET になっていた。あちらでは、学会誌の編集にネットワークによるパソコン通信が使われ始めているのである。

本学会の場合、会誌そのものは部数も多く、査読もそれほど遅れていないからいいようだが、論文誌にはいろいろ問題があり、印刷部数が極端に少ない欧文誌はいつも困難な条件のもとに発行されている。こうした窮状を救うのに、本学会お手のもののハイテク技術が使えないものであろうか？

もし論文誌が電子出版の方へいけるとすると、その格納先としては、大学の計算センターなど以外に、文部省直属の学術情報センターもあり、CD-ROM 配布の可能性もある。パソコン通信の利用は、各研究会あたりのレベルからそろそろ試みてはどうだろうか？

(昭和 62 年 3 月 16 日)

[†] 本会理事 東京大学大型計算機センター